

シベリア抑留の思い出

千葉県 宮崎 定 雄

騙されてシベリアへ

昭和二十年十月二十二日夕方、帰国を信じた我々軍人軍属約五千人が乗船し樺太大泊出港。北海道稚内上陸を夢見ていた真夜中ごろ、船が停まった様子との話し声にデッキが上がって見る。宗谷海峡の真っ只中、故障か信号待ちか、種々噂が飛び交う。無電待ちが正解だ。船長は、出港・進路、総てソ連上部よりの指示によるとのこと。洋上にて約二時間停止後、船は南西に進路変更。夜明けごろ船の速度が落ち、また、北西に進路変更となる。北海道と逆方向。船内は大騒ぎとなり、甲板に船長室に船室に、幹部の往来頻繁になる。真岡に寄港し、戦友を乗船させるとの話が大勢を占める。何となく不安感が起こる。

二十四日小雨降る中、船進路また変更、北上を続け

る。ソ連兵、自動小銃にて警戒嚴重となり、甲板の出入り困難となる。夕方真岡に近づくが、どこからともなく、真岡に戦友おらずとのこと、寄らないで恵須取に寄港、戦友を乗船。小樽か留萌に入港の話、専ら。

夕方、一部から、ソ連に連れて行かれるかもしれないとの悲観説も乱れ飛ぶ。二十五日朝方、船は急に西北に進路変更。陸地が見え、港が見え、いよいよ接岸、ところが沿海州ソフガワニらしい所に上陸。がっかり。私語もなく元気もなく、ソ連軍管理下に北海道帰還の夢破れて最悪の捕虜に。

後日談。上陸地ポートワニ。ソフガワニ軍港より北方約二十キロの地点。

捕虜生活、飢餓と寒さの戦い

昭和二十年八月二十五日、ポートワニ港上陸後、輜重八八連隊と軍属等混成約千名で志村大隊を編成。小生、北田小隊の分隊長。隊員十五名。本年六月入隊の若年補充兵と三十五歳以上の老年兵、半々です。

貨車にて北上。二十七日、ルジューに着く。鉄道線路保線作業と捕虜住居一棟増築。収容所は木造板張り

のバラック。周囲は高さ四メートルくらいの板塀で、有刺鉄線が張られ、四隅に望楼があり、ソ連の歩哨が望楼上より昼夜警戒していた。

兵舎は、細長い部屋の中央通路の途中に急造ドラム缶のストーブ一個で採暖。両側は二段ベッド、一間に上段八名、下段七名で、身動きも不十分な着たままの就寝。夜中、用便後ベッドに戻っても寝る隙間なく、ストーブの側で起床まで過ごす人多数です。夜食のパンの配分の大小で大騒ぎ。百から百五十グラムの物を等分に切り、即製の天秤ばかりにて調整。小指の先くらいの切れ端を串に刺し、七、八人グループごと籤引きにて取り合う生活。照明のただ一個のランプは石油の配給不足で、白樺の皮を薄く細くして燃やし交代で持ち、夕食分配中、照明にする。松脂の使用もあり、照明暗く周りの人、油煙で真っ黒になり、不評。

十一月初めころより虱が増える。夜手探りで殺し、休日は虱取りが日課です。

十一月下旬ごろ、北隣のアクール収容所に発疹チフス流行、多数死亡。収容所閉鎖の噂あり。

このころから休日ごと、入浴と被服消毒あり。ジスカメラは密閉した石室で、高温で石を焼き、その熱蒸気で被服を殺菌消毒する。その間、隣の浴室で一名五分くらいで、長方形の木箱にぬるめの湯一リットルくらいをもらい体を拭く程度。二、三時間裸で震えながら待つ。

十二月上旬、入浴時、頭髮、陰毛の剃髪あり。丸坊主の頭は特に寒く、陰部は脱力感です。翌年二月と四月、計三回実施される。

昭和二十一年一月一日、ダモイ（婦国の露語）と言われ、貨車にて南下。三日、ポートワニ到着。線路ソフガワニ方向の延長工事作業。線路路盤造成、整地の重労働です。食糧、特に野菜不足で、栄養失調多くなり、死亡者頻繁。

一月下旬、分隊長・佐藤千代松君、夜、「ぼた餅、お汁粉などを腹いっぱい食べたい」と話した。眠いからと先に眠ったが、朝起きず。死亡確認する。北海道空知出身の補充初年兵、十九歳の落命です。労働優先の國、仲間はだれ一人見送ることもなく埋葬され、場

所も知ることなく終わる。

三月中旬ころより体力衰え、壞血病の兆し現れる。直径十センチ程度の丸太に足が上がらず、踏み越すのも困難になる。

四月末、月例身体検査でジストロフィーと診断される。栄養失調とのこと、労働免除。

五月五日ごろ、ジープにてチブサレーに移動。通称、オーペーアジン収容所に入所。

五月中は寝たきりの生活。食事と用便のみ歩く。日中は壁に凭れ過ごす。就寝時は仰向きは尾てい骨が床に触れ痛く、半月くらい、俯きで両腕で胸を庇いながら過ごしました。食事は油と砂糖のみ多い普通食です。

六月は燃料用薪採り、軽い物、日に二回の生活。

捕虜生活不安と無気力の時期

六月末、恒例の身体検査、トリーカテグリ、三級労働者の軽作業となる。

七月三日ころトラックにて北上、トムニー移動。収容所三、四カ所転々として管内雑役、保線作業の雑役軽作業、線路付近の除草と清掃など。この時期、食べ

られる野草はもとより、蛙、蝸牛、鼠など、出会った物全部食べました。

八月下旬、身体検査、トリーカテグリ十五名の一人となり九月初めダモイ、帰国予定。洗濯した被服と交換され待機する。九月九日、迎えのトラック到着。十五名中十三名にて出発。残留二名の不運者となる。高年齢順とのこと、まだ労働できるからか。

九月十三日、歩行にて移動。途中空き家に一泊、十五日、インボ収容所に入所する。

抑留生活四年間中、一番恵まれた生活でした。援農四日間、馬鈴薯で満腹感を味わいました。漬け物工場にて同郷夕張の表氏に会い、漬け物で満腹と回顧談に時間を忘れる。抑留の間、知人友人との出会いはただ一回でした。

九月二十五日ごろより測量助手の補助仕事でした。

インボ付近の農作耕地の測量です。監督はソ連人。スターリン政策批判の流刑者で、前はモスクワ大学の教授とのこと。助手宮川氏は大泊付近炭鉱の測量技師とのこと。

小生は箱尺、木杭、円匙、鉋など携行随行し、指示により箱尺立て、支え木杭の穴掘り、杭埋め、邪魔な雑草灌木の除去の仕事でした。監督は休憩時間を多くして、草の実、木の実、野草を採り説明し、栄養、特にビタミンの補充を率先実行、試食する。野苺、薔薇の実など、五十年後の今も思い出します。

十月末ころより、木造堤の工事関係測量に変更。線路に流れる川水を防ぐため、堰堤建築。春先、河川の凍結と解氷と雪解け増水で水面が盛り上がる。当地の小川四メートルくらい。木堤、高さ六メートル、長さ二〇メートル。底面に二メートル方形の暗渠を造り、土管一メートル五〇センチ円形のもの、線路地下二メートルを通す工事の設計と測量。

この工事中、約百メートル沢向かいの山腹で用材伐採中、倒れた大木斜面に加速、先に倒した大木に衝突。この大木、方向を九〇度変換、沢を飛び越えて三十メートル斜め下にて作業中の大工・松村君を直撃です。ウンと言ったのみ出血もなく、五分くらい後、小生接近時、脈拍なく呼吸なく即死でした。

この作業中の昼休み、山中にて松の実を発見、木登りして採取。日本の松かさより大き目で、十一月半ばの季節に青々していました。火で煎って食べました。落花生のような味で、一段と脂肪分が強く、最高に美味でした。

ソ連では高値で、港のバザールでコップ一杯十ルーブルくらい、黒パン八キログラムの値段でした。我々捕虜は一日定量約三百から三百五十グラムでした。この時期三回、およそ三十個くらい採り食べ、楽しみました。

十二月末、工事了。一月初め、ポートワニに移動。ソ連の鉄道も日本と同じに線路の左側にキロポストがあります。

記憶：ルジュール 三五六キロ、トムニー 三六六キロ、インボ 三七八キロ、チブサレー 三九五キロ、ポートワニ 四三六キロです。

キロポストは、コムソモリスクと言うよりは、正確にはアムール河対岸ピワニ起点の距離。

ポートワニで三カ月ほど、線路路盤延長工事。

四月初め十キロ南下、ソフガワニ軍港に移動。飛行場の滑走路拡張工事です。

丘を切り崩し平坦にし、その土砂を低地に運び埋め、地ならしです。堅い岩石は爆薬で粉碎、円匙と鉄棒で作業、残土砂はトラックにて低地に運び平坦にします。

最初はトラック積み込み、ノルマ四名一日八台、達成すると十二台、次回は十六台、次回は二十台、最後は二十四台になりました。ノルマ未完では監督は作業続行で頑固です。日本人の指揮者の交渉も聞き入れず、日没後、ソ連警戒兵の権限で帰営することしばしば。

警戒兵は作業無関係、捕虜警備の時間強調。ノルマ十六台以後は土砂積載量を工夫、軽く中央のみ高く見えるごとく誤魔化し、監督の目を盗み、又は運転手に頼み、台数だけ走らせました。薄暮は有効でした。この時期七月半ば十日ほど、飛行場間の道路補修工事をしました。

作業中、蝮を発見、新潟県・佐藤源吾君捕獲。頭を潰し、皮を剥いで私にくださる。昼ごろ殺したものが収容所の夕食時、まだ体をびくびく屈伸させていまし

た。半分食べました。脂肪の強い鮭の刺身のような美味でした。翌朝は体力回復、爽快でした。朝、残り半分食べました。一日中爽快で労働が楽でした。四年間の抑留生活中、ただ一回の体験です。その後、死後数日の乾燥した蝮ももらい、食べましたが、効き目は半減でした。

十二月中旬、身体検査にて栄養失調の診断、入院予定となる。トラックの来るまで待機、所内留守番。ただし、箒と軽い薪を除き、重い物は使用禁止指示の生活でした。

二十三年一月十五日ごろ、トラック輸送にて、病院でなく、マンガフトのオーペーカロナに移動する。二回目のオーペー生活。慣れで不安感薄く、体調も前回より良く、半日の軽作業。主に採暖用薪採りも楽。なお、激しくなった民主運動も低調で安心でした。

週一回は演芸会、娯楽会もありました。将棋大会では私は全勝優勝して、賞品として将棋盤と駒をもらいました。マジャンも二、三回しました。抑留生活では恵まれた期間でした。

またまた騙されて、奥地へ

昭和二十三年三月十五日、ダモイ（帰国）の噂の中、収容所全員、およそ五百名、貨物列車にて北上。十八日、アムール河岸に到着する。解氷期が近いため、仮設線路を機関車は貨車一台ごと、対岸まで折り返し輸送する。十時より始め十六時ごろ、コムソモリスクの灯の見えるころ完了する。ちなみに、十二月から三月は水上仮設線路上、五月より九月初めまで船で渡航、列車はコムソモリスクの手前より南西に走り、ハバロフスクの西より進路を西に変更。

三月二十二日ごろ、イズベストコーワヤに到着。帰国の期待外れて、無力感と脱力感でした。この後九月初めまで、記憶力減退。土地勘、特に日時、記憶不鮮明です。

イズベストコーワヤより支線を北上して、転々と三、四カ所移動。作業は電柱立て。地面を二メートル掘り、埋める仕事です。地面は一メートルくらいまで凍結していて、焚き火して鉄棒で掘る。一メートルより下は、湿地土砂、小石、雑草木で、深まると湧水で難儀。一

メートル五〇センチくらいで掘り止め、監督を誤魔化して立てました。

平成四年七月初め、この地帯を墓参に訪れたとき、昔の電柱、先端地面すれすれの物、支柱により四、五メートルの物を架線のみ新しくして使用していました。夏ごろはタランジャ付近にて奥地からの残土を鉄橋上よりの川捨て作業です。不定期、特に夜間が多く、一列車終わっても次から次とあり、最長二十時間通しでした。

二十三年八月末、帰国の指示あり。テルマに移動。九月一日、服装整備して営門前に五百名集合。氏名点呼順、五名あて営門外に出す。最後まで私を含め六名点呼なく、残し、出発する。理由不明。翌日三百名くらい、翌々日二百名くらい、他より到着、合併する。数日後より夜、点呼後、広場にて、残留六名、反動分子のつるし上げが始まる。正面の壇上に立たされ、大勢の怒声罵声に対し返答は無駄で、無言の抵抗よりなく、時間の経過を待つのみでした。

九月末、二名、元警察官、他の二名、憲兵とか、他

収容所へ転出。十月初めから私と残り一名、各兵舎一巡のつるし上げでした。十月末、残り一名転出。真相不明、うやむやで終わり。誤った民主主義運動の最悪期間でした。

マンホール工事。地面を六メートル掘り、直径五センチの給水鉄管を埋設する作業です。凍土は岩石より堅く、焚き火で暖め鉄棒にて砕く。一メートル過ぎると凍結はなく、深まるほど土砂は掘りやすいが、一メートル幅の穴、狭さのため、土砂の地上搬出が大苦労です。中間に板を並べ、二段バネ、三段バネです。五メートル以下では、馬穴に針金又はロープを付け、上より巻き上げの難工事です。ノルマは上がらず、時間延長が時々でした。

次は官舎建築。二階建て一棟の建設でした。私の仕事は壁塗りで、不器用のため仕事が遅く、なおかつ下手。三日でクビでした。次は官舎の不寝番です。塗りがたての壁を凍らせないため、各室八個のペチカの火を焚き続けることで、夜十七時から翌朝八時まで一睡もできず、二カ月の間、大変な重労働でした。この期間、

付近の廃屋の陰に物置小屋を発見。中は満州からの戦利品か、衛生材料と医薬品です。ピオフィルミン五百グラム入りの瓶十五本を盗み出し、二日に一本あて熱湯で練って食べました。片栗粉のような味、美味最高、体力回復に役立ち、思いがけない幸運でした。

次の仕事は工事器材の番人でした。夜十七日より朝八時まで、器材小屋の外の不寝番。廃材で三面開い、屋根にも廃材を乗せ、風雨を防ぐ所を自分で作った粗末な物でした。風に弱く、翌日建っているのが珍しい有様でした。二月でも明け方、気温零下四〇度以下の時もあり、凍死しないため焚き火を切らさず、手足を常に動かし、眠らず十五時間過ごすつらい生活でした。

夜勤の最後は踏切番でした。二坪くらいの小屋。後ろに四坪くらいの倉庫、馬鈴薯や穀物を入れて施錠してありました。夜十七時より朝八時まで不寝番と、前の線路の踏切番でした。列車は勤務時間中一回から二回、不定期通過です。

警笛が聞こえたら遮断機を下ろして、列車通過後、遮断機を上げる楽な仕事でした。季節も初夏で、少し

の焚き火で暖を取り、暇を持て余し、晴天には星空を眺め瞑想に耽ることのあった楽な勤務でしたが、良い期間は短く、二十日くらいで終わりました。

短日数の作業で、馬扱いがありました。最初は、満州より連行した日本馬で糞便運搬でした。生まれて初めて馬扱いです。春先、氷の溶けかかった糞便を鉄棒で碎き、田匙で馬そりに積んで川に捨てた作業です。十五日くらいで解氷が進み、終わりになりました。その間三回の仕事は、馬が思うように動かず作業が遅れ、慣れた人の半分以下でした。昼食のスープ運搬は三十分到着が遅れ、作業員に迷惑を掛け、一回で終わりました。

秋には乾草刈り採り、運搬作業でした。去勢していないロシア馬で、日本馬の二倍くらいの大きさでした。扱いは素人では無理です。馬の意志で行動、私は握った手綱を引きずられるのみでした。草刈り作業二百日帰営時、営門直前で営内にいた牝馬を見たのか、突然発情、柵を開ける間もなく、馬そり諸共体当たりです。衛兵二名に押さえられ、柵を半分壊して止まりました。

私は気持ちが悪転して動作不明、大分叱られました。翌日、馬扱いクビ。処罰はなしでした。

昭和二十四年十月十四日十一時ごろ、土砂下ろしの作業の待機中、伝令到着、即刻帰営しました。翌日、十五日帰国と言われて午後営門点呼、夕方テルマ駅で乗車、出発しました。

帰国、半信半疑でした。十六日、途中沿線の収容所無人か、有人があれば朝鮮人ばかり、日本人は見えず。今度は本当の帰国かもと、希望が出ました。列車も南に進行しました。

十月十八日夕方、ナホトカに到着しました。慌ただしく行事を過ごして二十二日午後、「明優丸」に乗船出港しました。二十五日、無事舞鶴上陸。七年七カ月ぶりの祖国。出迎えの婦人の姿を見て自然に涙が出ました。

ソ連上陸十月二十五日、舞鶴上陸十月二十五日。ソ連入出国が満四年を挟んで同月同日という偶然に、不思議な運命を感じました。

【執筆者の紹介】

住 所 千葉県鴨川市東町五四七六番地

生年月日 大正九年十月十一日生

軍 歴 昭和十七年四月一日 樺太上敷香 歩兵第

二五運隊 現役兵入隊

昭和十七年七月一日 衛生兵転科

昭和二十年八月一日 陸軍衛生伍長

昭和二十年八月終戦 シベリア抑留生活

昭和二十四年十月三十一日 復員帰郷

入隊からシベリア抑留を顧みて

岐阜県 角 野 重 光

昭和十九年三月北部第三部隊（旭川）に入隊、同月二十七日深夜旭川護国神社を参拝、旭川駅を出発。列車は全部鎧戸を閉め、一路南へと進行、青函連絡船に乗り青森に到着。途中一部区間、鎧戸の開放命令の出る所もあり、窓からやっと外を眺めると朝方であった

が、農家の人が麦踏み場面もあり、やがて博多に到着。ここより船で釜山に着き、朝鮮を経て東満の理春部隊に四月三日夜八時ごろ到着。その年の八月、部隊は北満の佳木斯に移動。十一月、部隊にアマーバ赤痢がはやり、私もこの赤痢に罹り入院、二十年一月五日退院。

一月十日、部隊はカ号演習という名目で出動。これには一日でも病院に入った者はいれず、私は残留部隊として残され、その後混成部隊として結成した後で分かったのであるが、カ号演習で出動した本隊は台湾に出動したのであった。

その後、私たちは陣地警備歩哨として派遣。そして五月、部隊より演習方法が一部変わったとのことで、私たちは交代兵と代わり本隊に帰った。

そのうちに、どうも日ソ戦が近いうちに始まるかもしれないとの噂がたち始め、そうしているうちに、中隊長から、そのためには現在のこの兵舎では今年の冬は過ごせないのです、今年の冬は山にトンネルを掘ってそれを兵舎にするのと言われ、先発隊としてK